HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	乳児期における養育者による注意のしつけ
Author(s)	常田, 美穂; 陳, 省仁
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 92, 1-10
Issue Date	2004-02
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.92.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28920
Type	departmental bulletin paper
File Information	92_P1-10.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究科
紀要　第92号　2004年2月

乳児期における養育者による注意のしつけ

常田美穂*・陳　省仁**

Attention Tutoring by Parents in Early Infancy

Miho TSUNEDA and Shing-Jen CHEN

【要旨】乳児期早期の対面相互交渉において，養育者は頻繁に子どもの注意を引こうとしている。こうした養育者の行動は子どもの注意の発達に影響を与えているのではないだろうか。本研究では，1組の母子における遊び場面の縦断観察の中から「子どもの注意を引こうとする養育者の行動」を抽出し，養育者が子どもの注意を向けさせる対象やその方法を記述した。その結果，養育者は子どもの注意を引く行動を通して，子どもの注意の拡大，注意の精緻化，そして二者が第三項へ注意を向け合い相互交渉する際の情動表出のあり方を子どもに伝えていることが示唆された。
【キーワード】乳児期，注意の発達，注意の質，注意喚起行動

問題と目的

はじめに

近年，注意欠陥多動性障害を疑われる子どもが増えてきており，保育や教育の現場では，教師たちがその対応に頭を悩ませている。教師たちが指摘するのは，イスにじっと座っていられない，教師の話をよく聞いていない，課題に集中して取り組むことができないなどの子どもたちの行動の増加である。なぜこうした行動をとる子どもたちが増えてきたのだろうか。その要因としては神経生理学的レベル，行動レベルで様々なことが考えられるが，そのひとつとして，「いつ・どのように・どんな対象に注意を向けるのか」という子どもの「注意の質」の変化が考えられる。本研究では，注意の質が変化する可能性も含めて，子どもの注意そのものがいかに発達するのかということに焦点を当てて考えてみたい。

注意の発達

子どもの注意の発達はこれまで，「対象を見る」という身体機能の一部としての注意（注視）機能の発達と，「他者が見ている対象に自分も注意を向けて同じ対象を見る」という他者認知・他者理解の発達という2つの方向から研究が行われてきた。

* 北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程（教育臨床講座）
**北海道大学大学院教育学研究科教育臨床講座教授

まず，身体機能の一部としての注意の発達を調べたものとして，サッケードと呼ばれる眼球運動についての研究があげられる。人が対象物を注視するときには，サッケードと呼ばれる特徴的な眼球運動が見られることが知られている。サッケードとは，ある注視点から別の注視点への素早い眼球運動のことである。このサッケードのコントロールのための注意過程は2つの側面に分けることができる(Matsuzawa, & Shimojo, 1997)。1つは対象への固視をやめる「注意の解放過程」と，もう1つは次にどこに目を動かすのかを決める「ターゲットの選択過程」である。Matsuzawa, & Shimojo (1997) は，2カ月半から12カ月の乳児45人と成人5人を対象に，この注意の解放過程に焦点を当てて乳児のサッケード反応時間を測定することにより，注意過程の発達を検討した。

サッケード反応時間とは，ターゲットの提示からサッケードの開始までの潜時のことをいう。Matsuzawa, & Shimojo は，固視点が消え，それぞれ① 200，② 400，③ 800 ms のギャップ間隔をおいてからターゲットが現れるギャップ条件と，④固視点が消えたと同時にターゲットが現れるノー・オーバーラップ条件，⑤固視点がついたままターゲットが現れるオーバーラップ条件の5条件で，乳児のサッケード反応時間を測定した。その結果，どの月齢でもオーバーラップ条件に比べてギャップ条件の方が反応時間が短かった (Matsuzawa, & Shimojo, 1997)。特に 400 ms のギャップ間隔を設けた条件では，2カ月半でもおよそ 300 ms の潜時の素早いサッケードが生起した。それに対してオーバーラップ条件では，2カ月半群の反応時間が非常に長く，サッケードの生起が困難であることが示された。オーバーラップ条件での反応時間は，その後4カ月頃までに急速に短くなり，6カ月以降は成人までほとんど変化が見られなくなった。

このことから，著者たちは，能動的に注意を解放して新たな対象を見る能力は，生後4カ月前後に発達して6カ月までにほぼ完成すること，また能動的な注意解放過程が発達することにより，意識的な注意のコントロールが可能になることを指摘している (松沢・下條，1996)。こうした乳児期の注視機能に関する研究から，生後4カ月以降の乳児であれば，自発的・意識的・選択的に環境内の対象に注意を向けて，能動的に対象を見ることができるということが明らかである。

では発達早期の乳児は，他者との対面相互交渉中にどのような対象に能動的に注意を向けているのだろうか。対面相互交渉では，「相手が何を見ているのか」を知ることは，その相互交渉の進行を予測して適切な行動を選択するために非常に重要である。Butterworth は，次のような実験パラダイムを用いて乳児がいつ頃から正確に相手が見ているところを自分も見ることができるようになるのかについて調べた (Butterworth, 1991 ; Butterworth, 1995 ; Butterworth, & Cochran, 1980 ; Butterworth, & Jarrett, 1991)。

これらの研究において，乳児は母親と対面して，母親の目線と同じ高さになるようにイスに座った。母親は，乳児とアイコンタクトを取った後，頭の向きを変えて実験室内のさまざまな場所に置いてあるターゲットを見るように指示された。その結果6カ月では，母親の頭の向きに合わせて自分もそのターゲットを見ることができたが，同じ方向に2つのターゲットがあった場合には，正しいターゲットを見ることはできなかった。また12カ月では，乳児の視野内であれば同じ方向に2つのターゲットがあっても母親が見ているターゲットを正確に見ることができたが，ターゲットが後方にあった場合には，振り向いてターゲットを見ることはできなかった。18カ月では，見える範囲にターゲットがあると，後ろを振り向いてまで母親が見ているターゲットを探すことはしないが，目の前に何もなければ後ろを振り向くことがあった。

Butterworthによれば，大人の視線の方向は乳児期初期から何かを伝えようとする機能を持っており，母親の目と頭の動きは，乳児がどちらを見るべきかを知らせる合図として働く。生後6カ月頃には，こうした母子の生得的な注意機構の上に，環境内にある対象に本来備わっている，注意を引きつける特性が働きかけることによって，対象を含む三項的コミュニケーションが始まる（生態学的メカニズム ecological mechanism)。生後6カ月では，乳児がどの対象を見るかは，環境内の対象の特性に依存しているが，12カ月頃になって乳児が認知的に発達すると，母親の目と頭の動きだけから，母親の視線が指示する対象をより正確に特定することができるようになる(幾何学的メカニズム geometric mechanism)。最後に12～18カ月になると，表象能力が発達するので，自分の視野内に母親が見ているターゲットがなかった場合には，今ここに存在しない対象を想起し，後方を振り向いてターゲットを探すことができるようになる(表象的メカニズム representational mechanism)。このようにButterworthは，生得的な注意機構が基礎となって，幼い乳児でも大人の視線の方向を理解して他者とのコミュニケーション・ネットワークにのることができるのだと示唆する。

本研究の目的

こうした注意の発達に関する研究から，子どもは乳児期早期から能動的・選択的に環境内にある対象を見ているということ，また対面相互交渉においては，徐々に相手の視線の方向を正確に捉えて自分も同じ方向を見るようになることがわかる。これらの研究において，乳児が注意を向ける対象はスクリーンに映し出される図形や，予め決められた大人の〝頭の動き〟というように全て厳しく統制されている。なぜなら，これらの研究では，注意機能は子ども個人の能力として発達し，初めは未熟だが成長と共に成熟して大人と同じ機能を持つようになるということを前提としているため，刺激を一定にした方が子どもの能力の変化を正確に測定することができるからである。

しかし，実際の対面相互交渉では，乳児が注意を向ける相手はそのような静的な存在ではない。子どもとやりとりする大人は，積極的に子どもの注意を引こうとしてさまざまな工夫をしている。例えば，唇を鳴らして子どもが大人の顔を見たところで，目を大きく見開き口を開けて乳児の注意を大人の顔に引きつける，泣いている子どもに大人がおもちゃを見せて動かしてやることで，子どもの注意をおもちゃに引きつけてあやすなどということは，日常生活の中で頻繁に見られることである。このような「子どもの注意を引こうとする大人の行動」は，乳児の注意の発達に影響を及ぼしていると考えられる。特に，対面相互交渉中に大人がどのような対象に，またどのような方法で注意を向けさせるのかということが，上で述べたように近年注目されている子どもの「注意の質」に影響を与えているのではないだろうか。

本研究では，1組の母子における遊び場面の縦断観察の中から「子どもの注意を引こうとする養育者の行動」を抽出し，それを養育者はいかに乳児の注意を引いているのか，特に注意を向けさせる対象とその方法はどのようなものか，またそのやり方は子どもの発達によっていかに変化するのかという観点から記述することによって，注意の発達における養育者の行動の影響について考察する。

方　法

対象者：2000年7月27日生まれの男児(第一子，出生体重3506 g)とその母親(出産時29歳)。児は，出生時における異常はなく，保健センターで行われた1カ月，4カ月健診においても発達における問題のないことが確認された。

観察期間：児が生後満2カ月から7カ月まで（2000年9月～2001年2月)。

観察：観察者が児の機嫌のよい午前中に母子の自宅を訪問し，居間で遊んでいる母子の様子を8ミリビデオカメラ(SONY Video Hi8 Handycam, CCD-TR11)で撮影した。訪問は，1～2週おき（平均8.5日おき）で1回あたりの訪問時間は約1時間であった（全観察回数21回)。撮影は，母子が自然に遊びに入るのを待って開始され，途中で児の機嫌が悪くなり激しく泣き出したり，自然に一つの遊びが終わったと思われたときに終了した。その結果，1回あたりの撮影時間は平均17分（レンジ6～29分)，総観察時間377.3分であった。母親には「いつものようにお子さんと遊んでください」と教示し，使うおもちゃや姿勢，母子の位置などはいっさい指示しなかった。観察者は，撮影中は，母子が話しかけてきたとき以外対象者に関わらなかった。撮影は，母子両者が画面に入るようにカメラの位置を調整しながら行った。

分析：8ミリビデオテープを再生しながら，母親が乳児の注意を引こうとする場面をエピソードとして抽出した。その際，母子それぞれの表情，乳児の視線，母親が乳児に注意を向けさせる対象，母親の注意の引き方に注目して記述した。以下に挙げるのは，各月齢の典型例である。エピソード内の↓は前の行動が続いていることを示す。また，（　)内の時間は撮映開始から経過した時間を示す。

結果と考察

事例1：状態を確かめ，注意喚起することによって子どもの状態を変える
月　齢：2カ月0日（12：42)
姿　勢：母親は体育座りをして児をひざの上にのせている。児は仰臥の姿勢。

児	母　親
黙ってまじめな顔で母親を見つめている。	子どもの顔を見て苦笑。
↓	児の左腕を動かしながら自分のひざを左右に動かして児の体全体を揺らす。
徐々に眉が上がり口をゆがませて泣きそうな顔になる。	児のマネをして唇をとがらせる
顔をしかめ「うっ」と小さな声を出し目をつぶって泣き顔になる。	驚いた顔をしてみせる「あら？」
↓	児の左腕をつかんで動かしながら顔を近づけて「泣くの？　泣くの？　泣くの？　どしたの」と話しかける。
目を開きまじめな顔で母親を再び見つめる。	
まじめな顔で母親を見つめたまま足で母親の腹を蹴る。	顔を遠ざけて「えへ」と笑う

事例1では，子どもはまだ首がすわっていないが，母親のひざで首が固定されており見つめ合いの状態が持続している。しかし子どもの機嫌が徐々に悪くなって母親から注意がそれると，母親は顔を近づけ話しかけることによって再び自分への注意を取り戻している。このように子どもの注意が母親に向いていないときに自分の顔を見せることは，2カ月0日～5カ月20日ま

で続いたが，その後，母親の働きかけに対する子どもの反応が素早く確実になると，このような顔の見せ方は減り，声やおもちゃの音を使った注意喚起が増えた。母親は子どもの状態を確かめ，顔を見せることによって子どもの注意の持続を促しているが，子どもはこの中から，このように顔を近づけて声を出すと相手の注意を自分に引きつけることができるということを学んでいるのだと思われる。

事例2：体の動きや声の調子を利用した注意喚起と注意の持続
月　齢：2カ月14日（7：49）
姿　勢：児は座布団の上に仰臥の姿勢。母親は児の足下に座り上半身を前に乗り出して児の上にかがみ込むような姿勢。

児	母　親
左上の方を見つめている。	児の両腕を持って動かす。
↓	児の両腕を持って動かしながら，身を乗り出して児の視界に入り「こっち向いて。こっち向いてー。」
左上を見たまま足を蹴るように動かす。	児の両腕を動かして「Hちゃーん」
↓	いったん上半身を起こした後素早く児に顔を近づけ，さっきよりも高い声で「Hちゃん」
↓	児の足を触る。
↓	再び上半身を起こした後素早く児に顔を近づけ「Hちゃん」
母親を見る	
↓	げんこつ山のたぬきさんの手遊び歌をやってみせる。

2カ月14日から相互交渉中に主にとっていた児の姿勢が，“母親のひざの上に仰臥”から“座布団の上に仰臥”へと変化した。これは母親によると，子どもの体重が重くなって膝にのせておくのが辛くなったためである。それまでは子どもの頭の向きは母親によってコントロールされていたが，姿勢が変わって母親による制御が効かなくなると，母親の呼びかけによって子どもが母親を見たとしてもその持続時間が非常に短いものになってしまった。事例2では母親は体の動きや声の調子の変化を利用して自分へ注意を誘導し，その後でその注意を持続させるような働きかけ（手遊び歌）をしている。

事例3：触覚を利用した注意喚起
月　齢：2カ月0日（2：00）
姿　勢：母親は体育座りをして児をひざの上にのせている。児は仰臥の姿勢。

児	母　親
母親を見つめながら手をわずかに動かす	布製のガラガラを動かし音を鳴らしながら児の顔と自分の顔の間に提示する「ゾウさん遊びにきたよー」
↓	児の視界の中でガラガラを動かす「Hちゃん遊ぼうって。遊ぼう。」
↓	「Hちゃーん」ガラガラで児の右頬をつつく「Hちゃーん」
母親を見つめながら口を開ける。	ガラガラを児の視界から少しはずし「おう」児のマネをする。
母親を見つめながら「あーう」足を動かす	再びガラガラを児の視界の中で動かす。

事例３は，子どもの注意を母親から別の対象へ誘導させようとしているエピソードである。２カ月０日では，見つめている対象から自由に視線を転換することが難しい。このエピソードでも，母親が子どもの視界にガラガラを入れているにもかかわらず，子どもはガラガラを見ないで母親を見つめたままである。その場合母親は，ガラガラで子どもの頬をつつくことによりガラガラへ子どもの注意を誘導しようとしていた。このように子どもが見ていない対象へ注意を向けさせるときに，その対象で子どもの体にふれる行動は２カ月０日～７カ月１日まで見られた。これは，自由で素早い注意の転換が難しい乳児期早期の子どもに対して，触覚を利用することで注意の転換を促す行動であると考えることができる。このような母親の行動は，３カ月後半以降，子どもの首がすわって注意の転換が容易になると徐々に，見るだけでなくつかむ，ひっぱる，たたくなど対象に対する子どもの行為を促すものへと変化していった（事例５）。

事例４：モノを見た後母親の顔を見せる
月　齢：３カ月25日（4：18）
姿　勢：児は座布団の上に仰臥の姿勢。母親は児の足下に座り上半身を前に乗り出して児の上にかがみ込むような姿勢。

児	母　親
中央で両手を結んで左側を見ている	絵本を取り出す
↓	絵本を児の正面胸の上に提示「わんわーん，わんわんがいるよ，わんわん，わん」
頭を動かして絵本を見る	「お返事わんわん」
絵本を見ながら微笑，手足をバタバタさせる	「お返事わんわん，わんわん，わんわん」
絵本を見ている	「はい」ページを開き絵本を読んでやる
絵本を見ながら発声「うーっげーべー」	「ねこのお返事にゃーにゃー」絵本を読んでやる
絵本の方に手を伸ばす	「ぶたのお返事ぶーぶー」絵本を読んでやる
黙って絵本を見てさわる	絵本の飛び出ている部分で児の手をさわる「ぱくぱく」
手足を動かし絵本を見ている	絵本を閉じて児の中心線より右によけ「はい，Ｈくんのお返事は？」児の胸に手を当ててゆするように動かし，児の視界に自分の顔を入れる
↓	児の左腕を持ってゆする
↓	絵本を児の中心線上に戻す
絵本の動きを追視して正面を向くが絵本を見たままで母親は見ない	「Ｈくんのお返事はどうですか？　Ｈくーん」絵本の上に顔を出して児の左腕をゆすりながら呼びかける
絵本を見ている	「Ｈくーん，はーい」児の左手を挙手させる
絵本を見ている「えー」	「Ｈくーん，ぶぶー，にゃーん，わんわーん」声かけに合わせて児の左手を挙手させる
絵本を見ている	「はーい，でしょ？」児の左手を挙手させる
「うげ」絵本から目をそらして母親を見る（無表情）	「はーい」児の左手を挙手させる
母親を黙ってみている	「にゃ。ぐぐー」のどを鳴らして音を出す

事例４からは，子どもの注意の転換が容易になっている様子がわかる。また母親は，子どもが対象に注意を向けてその対象への注意を持続させるだけでなく，その後に母親へも注意を向けさせるような働きかけをしている。母親は絵本を見ている間の子どもの表情を確かめようとしてこのような行動をとっているものと思われるが，このことが結果的に対象と相手の顔の間を交互に見るという注意パターンを生み出している。事例４のエピソードでは子どもはまだ対

象から母親への素早い注意の転換はできていないが，それでも母親は子どもが既に注意を向けている対象（この場合は絵本）を利用することによって自分に対して子どもの注意を誘導している。この時期では，こうして母親を見たときの子どもの表情は無表情である。

事例5：モノを見た後母親の情動表出を見せる
月　齢：4カ月2日（1：55）
姿　勢：児は座布団の上に仰臥の姿勢。母親は児の足下に座り上半身を乗り出して児の上にかがみ込むような姿勢。

児	母　親
ハンカチを見ている。	ハンカチの先で児の手のひらをつつく「びょんびょーん」
ハンカチを持っている母親の手を見る。	ハンカチの先で児の手のひらをつつく「つかまってくださーい」
ハンカチを見る。	ちらっと児の顔をみてからまたハンカチの先で児の手のひらをつつく「びょんびょーん」
ハンカチの先を握る。	ハンカチの先で児の手のひらをつつく「つかまってくださーい」
ハンカチの先を握っている手を口元へ持っていきなめようとする。	「お，つかまったつかまった」ハンカチを持ち上げる。（児の顔，ハンカチ，母親の顔が一直線上になる）
ハンカチを握ったまま母親の顔を見る（無表情）。	「お，お」児の顔を見て微笑
ハンカチを見る。	児の握るハンカチを引っ張る「ぴくぴくぴく，ひいたひいた」
母親の顔を見る（無表情）	児の握るハンカチを引っ張る「お，食べるか食べるか」
ハンカチを見る。	↓
母親の顔を見る（無表情）（ハンカチが手から離れる）	「あー逃げられちゃったー」

事例5においても母親は，子どもが既に注意を向けている対象を利用することによって，子どもの注意を母親にも向けさせようとしている。このようにして子どもが母親を見たとき，母親はほほえみの表情を見せる。これは，やりとりの最中に子どもと目が合うとうれしいという大人の単純な感情表現かも知れないが，このような表情を子どもに見せることは，相互交渉中の情動表出のあり方を子どもに伝える行動であるとも考えられる。

事例6：児が見ているモノを動かし，対象の〝性質〟に注意を向けさせる(1)
月　齢：6カ月17日（7：26）
姿　勢：児は床の上に座位。後ろに倒れないように背中をソファにくっつけて座らされている。母親は児の前に座位。児が左右に倒れるのを防ぐために児の体をはさむようにして両足を伸ばして座っている。

児	母　親
モビールをにぎったまま右カメラ方向を見ている	モビールをぶら下げて持っている
視線を転じてモビールを見る	「ひゅんひゅんひゅん」と言いながら児が持っているモビールを持ってゆする
チラッと母親を見てからまたモビールを見る	↓
モビールが手から離れる	↓
モビールを見ている	モビールを上に持ち上げる

事例7：児が見ているモノを動かし，対象の〝性質〟に注意を向けさせる(2)
月　齢：7カ月1日（0：06）
姿　勢：児は床の上に座位。母親は児の前に座位。

児	母　親
振り返って右カメラ方向を見ている	児の正面胸の前でポーチの口を開ける
視線を転じてポーチを見る	「あおーん」ポーチを自分の顔の前に持っていき「あおーん」
ポーチと母親の目を交互注視する	ポーチを自分の胸の前（児の顔の前）で開閉し舌を鳴らす
ポーチを見ている	↓
ポーチと母親の顔を交互注視する	「あおーん」ポーチを開閉する「パクパクパク」
ポーチを見ている	ポーチを開閉する「パクパクパク」
振り返って右カメラ方向を見る	↓

事例6と7からは，母親が子どもに対象を提示したときの子どもの注意の向け方が変化してきている様子がわかる。これはサッケードを生起させ能動的に注意を解放して新たな対象を見る能力が成熟したことの反映かも知れない。このことにより，子どもは対象と母親にいわば同時に注意を向けることができるようになったといえる。また，事例5～7を通してみてみると，対象の存在へ単に注意を向けるだけでなく，その対象の性質（揺れる，口が開くなど）へと注意を向けるようにと，母親は子どもの注意を徐々に精緻化していっていることが伺える。

事例8：互いに情動表出し注意の共有を確かめる
月　齢：7カ月29日（5：07）
姿　勢：児は床の上に座位。母親は児の前に座位。

児	母　親
床にあるひもをつかむ。	児がひもをつかむ様子を黙って見ている。
↓	ひもの片方をひっぱる「しゅるしゅるしゅる」
ひもから手を離し，ひもが動く様子を黙って見ている。	床の上をひもを這わせる。
ひもが動く様子を見ている。	児の体の上をひもを這わせる。
ひもをつかまえようとする。	床の上をひもを這わせる。
↓	↓
ひもの端を押さえつける。	「ちゅかまえた？」ひもを引っ張る。
ひもの動きを見る。	ひもを引っ張る。
顔を上げて母親を見て微笑。	「ちゅかまえた？」ひもを引っ張って微笑。

事例8は，子どもが母親を見た時に母親と同様の情動表出を見せるようになったエピソードである。まず，子どもは母親が動かす対象を見てその性質に注意を向け，つかんだ後，母親を見てほほえんでいる。このとき母親も子どもの顔を見てほほえんで見せている。7カ月後半には，このような情動表出を含む三項的やりとりが多く見られた。7カ月までに子どもは，対象と母親に同時に注意を向けてやりとりすること，またその中での情動表出のあり方について学んだのではないかと考えられる。

討　論

このように養育者と乳児の相互交渉を細かく見てみると，養育者は子どもの注意を引こうと

して様々な行動をしていることが明らかである。こうした養育者の行動は子どもの注意の発達にどのような影響を及ぼしているのだろうか。上に述べた事例から次のようなことが考えられる。

まず1つ目は「注意の拡大」である。乳児期早期では，子どもは自力で首の向きを変えることができず，またある対象を見るとそれに注視がとらわれてしまって自発的に凝視をやめることが難しい。そのような中で養育者は，唇で変わった音を鳴らす，顔を急速に近づけたり遠ざけたりする，対象を子どもの視界に入れて動かす，対象で子どもの体にさわるなど，音やモノの動き・触覚などあらゆる手段を使って子どもの注意を誘導しようとしていた（事例1～4）。このような養育者の行動は，子どもの注意を凝視点という狭い範囲から，自身の身体，母親を含む周囲の対象物へと空間的に拡大していく働きを持っているのではないだろうか。また母親は，子どもが自分の顔を見ると，手遊び歌をして見せたり(事例2)，その対象を動かして見せたりして（事例4～8）子どもの注意を持続させようとする働きかけをしていた。このことは，子どもの注意を時間的にも拡大させる働きを持っていると考えられる。このように空間的・時間的に注意が拡大していく中で，子どもは対象物と自分と母親との三項的関係について理解していくのではないかと思われる。

2つ目は「注意の精緻化」である。2～3カ月では，母親は子どもに身の回りにあるさまざまなもの(ガラガラや絵本など)を見せて，子どもがそれを見ると満足していたが(事例1，2)，4～5カ月以降は子どもがその対象を見るだけでは満足せず，子どもがそのものに手を伸ばすまで対象を動かしたり，「つかめるかな？」などと言って対象で子どもの手をつついたりした(事例5)。また6カ月以降は，その対象の性質がよくわかるように対象を動かして見せ（たたく，まわす，ひっぱる，ゆらすなど)，子どもの手を取って同じ動きをするように促した。こうした母親の行動は，対象の「存在」へ注意を向けることから対象の持つさまざまな「性質」へ注意を向けることへと，注意を精緻化していく働きを持っていると考えられる。このように大人が指し示す対象の部分に正確に注意を向ける能力は，子どもの言語理解に大きな影響を与えている（Tomasello, 1995)。

3つ目は「相互交渉中の情動表出のあり方を教える」ということである。相互交渉中に養育者は乳児に対して自分の顔を頻繁に見せている。もちろん対面相互交渉なのだから，顔の見えないやりとりというのはありえないのだが，母親は子どもに対象物を見せた後，対象物を動かした後，子どもが何らかの行動をした後に，わざわざ子どもの視界に入って自分の顔を見せていた。そしてこのとき母親は必ず，乳児期の子どもとのやりとりに特徴的な，大げさな顔（驚いた振りをする顔，困った振りをする顔）や微笑（Stern, 1979）を見せていたのである（事例1，5，8)。このことは，対象物や自分の動きと母親との関係を子どもに理解させ，そこで起こった出来事を二者が共有することを促すだけでなく，その際にどのように情動表出するべきかということを伝える働きも持っているのではないだろうか。上に述べた縦断観察の中でも，6カ月以降になると，子どもは対象物とそれを動かす母親の顔の間で交互注視することが増え（事例6，7)，また対象物ではなく母親を見て情動表出することが増えた（事例8)。

さらにこの相互交渉中の情動表出のあり方は，文化の影響を受けていることが考えられる。それぞれの国や文化圏によって，会話中の感情表現の仕方が異なるのは，このように生後すぐからの養育者との相互交渉の中で「いつどこに注意を向けるか，そのときどのような情動表出をするか」ということを乳児が学習した結果であると考えられる。

以上のことから，乳児期早期の相互交渉において養育者が乳児の注意を引く行動は，子どもの注意の発達，特に「いつ・どこに注意を向けるのか」という注意の質に影響を与えていることが示唆された。このような養育者の行動は，その後の子どもの対面相互交渉のあり方を規定するという意味で，「注意のしつけ(tutoring)」と呼ぶことができる。こうした養育者による「注意のしつけ」は，ほとんどが無意識のうちに行われている。こうした養育者の無意識のうちの「注意のしつけ」のあり方が変化すれば，当然子どもの注意の質も変化するものと思われる。現在の子どもたちの注意の特徴には，こうした「注意のしつけ」が影響を与えているのかも知れない。

今後は，さらに多くの事例を収集比較し，養育者による「注意のしつけ」のあり方と子どもの注意の発達の関係について検討することが必要である。

引用文献

Butterworth, G. E. 1991 The ontogeny and phylogeny of joint visual attention. In A. Whiten (Ed.), *Natural theories of mind (pp. 223-232)*. Oxford, England: Blackwell.

Butterworth, G. E., & Cochran, E. 1980 Towards a mechanism of joint visual attention in human infancy. *International Journal of Behavioral Development, 3*, 253-272.

Butterworth, G. E., & Jarrett, N. L. M. 1991 What minds have in common is space: Spatial mechanisms serving joint visual attention in infancy. *British Journal of Developmental Psychology, 9*, 55-72.

松沢正子・下條信輔　1996　注意コントロールの発達。正高信男（編），別冊「発達」19　赤ちゃんウォッチングのすすめ：乳幼児研究の現在と未来（pp. 108-121)。京都：ミネルヴァ書房。

Matsuzawa, M., & Shimojo, S. 1997 Infants' fast saccades in the gap paradigm and development of visual attention. *Infant Behavior and Development, 20*, 449-455.

Stern, D. 1979／2001 The first relationship. Cambridge, England: Harvard University Press.

Tomasello, M., & Merriman, W. E. (Ed.) 1995 Beyond names for things: young children's acquisition of verbs. Hillsdale, N. J.: L. Erlbaum.